平和

NHKスペシャル
“駅の子”の闘い
～語り始めた戦争孤児～

放送日：2018年8月12日　放送時間：49分

対象校種　小学校高学年・中学校・高校

対象教科　社会・道徳

この番組の良さ

● 知られざる「駅の子」の実像

太平洋戦争では、親を空襲で亡くしたり、親と離れ離れになったりして生まれた戦争孤児が12万人にも及ぶと言われています。戦後、これらの孤児たちは全国の駅で寝泊まりする姿が目撃され、「駅の子」と呼ばれていました。本番組では、当事者の証言をもとに、過酷な戦争孤児の実像を知ることができます。

● 戦争がもたらした差別や偏見

「駅の子」の生活は極めて過酷なものでした。食べるものがなく餓死する子供や、生きるために盗みや売春をせざるを得ない子供もいました。衛生環境も劣悪で「汚い」とさげすまれ、野良犬同様に扱われる子供もいました。病気にかかる子供も多くいました。しかし、多くの子供たちは誰からも助けを受けられなかったのです。

多くの「駅の子」が追い込まれ見捨てられたと感じた姿から、戦争が引き起こす別の悲劇や、差別や偏見について考えることができます。

執筆者
沖縄県西原町立西原東小学校
校長　**甲斐　崇**

番組活用のポイント

● 「戦争孤児」の実態から戦争のもたらす影響を考える

「戦争が終わってから本当の闘いが始まった」、これは太平洋戦争で親を失った戦争孤児の言葉です。

中学校学習指導要領社会科解説編では、「各地への空襲、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾の投下など、我が国の国民が大きな戦禍を被ったことなどから、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解できる」ようにすることを求めています。しかし教科書に掲載されているような事例以外にも、全国では様々な戦禍や惨禍が起きていたのも事実です。その一例が、戦中、戦後に生まれた「戦争孤児」であり、この番組にも取り上げられている「駅の子」です。

番組を活用することで、全国で目撃された「駅の子」がどのように生まれたのか、また「国や大人たちから見捨てられた」と語る彼らの壮絶な生活や、その後の人生を知ることができます。そうした知られざる戦争被害の一つの側面から、戦争がもたらす影響について多面的かつ多角的に考えることができます。

● 道徳科や人権教育の素材として活用する

戦争によって、ある日突然「戦争孤児」や「駅の子」となった子供たち。社会的弱者である彼らを、大人たちは「汚い」と蔑み、時には暴力をふるって排除しました。また児童福祉法に関する法整備が進む中で「狩りこみ」にあい、鉄格子のある建物に軟禁状態で収容される子供たちも多くいました。親戚や親類に預けられても「なぜ面倒を見なければならないのか」と心無い言葉をかけられ苦しい生活を強いられる子もいました。「着るものもなくて毎日寒かった。でも本当にほしかったのはぬくもりなんですよ」という当事者の証言から、番組では「駅の子」が差別や偏見を受け続けた実態や戦争の恐ろしさを伺い知ることができます。

戦争から生まれたこうした差別や偏見の実態は、道徳科の授業や人権教育にも活用できます。道徳科では、「相互信頼・寛容」、「公正・公平・社会正義」などの項目で利用することが可能です。